

平成26年5月13日、政策秘書課職員との話です。

私の古くからの友人が、「読んでみてください」と私に教えてくれたスピーチがあります。それを読んで私は、「まさにそうだ」と感じ、ぜひ、多くの方にも内容を知っていただきたいと思いました。

そのスピーチは、2012年6月にブラジル・リオデジャネイロで行われた「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」の際に、南米ウルグアイのホセ・ムヒカ大統領が行ったものです。



ムヒカ大統領のスピーチによると、ウルグアイは300万人の国民と、1,300万頭の牛と、800万から1,000万頭のヤギがいる国で、環境資源に恵まれ、食べ物の輸出国だそうです。一方で彼は、「世界で最も貧しい大統領」とも呼ばれているようです。

スピーチの中で、ムヒカ大統領は次のように述べています(抜粋)。

- 私たちが、この無限の消費と発展を求める社会を作ってきました。
- 私たちは、発展するために生まれてきているわけではありません。幸せになるために、この地球にやってきたのです。人生は短いし、すぐ目の前を過ぎてしまいます。命よりも高価なものは存在しません。
- 貧乏な人とは、少ししかものを持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことです。
- 発展は人類に幸福をもたらすものでなくてはなりません。愛情や人間関係、子どもを育てること、友達を持つこと、そして必要最低限のものを持つこと。これらをもたらすべきなのです。
- 人類の幸福こそが、環境の一番大切な要素であることを覚えておかなければなりません。

私たちにとって、幸せとはなんでしょうか。

ある市民の方が、こうおっしゃいました。「いい風が吹くまちには、いい木が

ある。私は、いい風が吹くまちに住みたい。」

風は目には見えません。私たちは、葉の揺れ方や、頬に当たることで風を感じることができます。風の吹く風景に感動したり、家族や大切な人と見た風の吹く風景が心に残る大切な思い出になっていたりする方もいらっしゃるでしょう。そうした感動や思い出が、私たちの幸せの一つを作っているのではないのでしょうか。

そうした風景がある長久手になれば、一度、長久手から離れていった子どもたちが、「また、ここに戻ってきたい」と思うまちになると私は思うのです。

ぜひ、役所にもまちにもいい風を吹かせたいと思うのです。

市長の話聞いて

半年ぶりに日本に帰ってきた宇宙飛行士の若田光一さんが、「カザフスタンのそよ風に迎えられた」とコメントされていました。地球に戻ってきたことを重力ではなく、そよ風で感じることを興味深く思いました。

市民の方がおっしゃる「いい風が吹くまち」は、気象現象の「風」だけではないと思います。私たち個人は、風に乗ることも、風を起こすこともできます。そよ風から始まり、大きなうねりになる、そんな取組みをみんなで盛り上げていけたらと思います。